

2024年4月14日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「信仰と祈り」

聖書：マルコによる福音書9：14～29

山上の変貌のあとイエスらが山から降りてくると、14節「彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた」。残りの弟子たちは子どもの病の癒しを求められるが、しかし癒すことが出来ないでいた。そしてその病にある子どもをそっちのけで、律法学者たちと議論していた。何を議論していたのか。おそらく彼らはこの病気はどのような罪を犯したからか？それが癒されるためには、罪のあがないとしてどういう献げものがよいか、いやそれは必要ないとか、そういう議論をしたであろう。しかし、ここで大事なことは、病に苦しむこの子どもの傍らにどれだけ寄り添っているかということである。

弟子たちは「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」とイエスに尋ねた。するとイエスは、「祈りによらなければ」と言う。この物語が、「癒し」を強調するお話であれば、ここで「祈りによらなければ」とはならないはずである。「祈り」というのは、「こちらは無力です」と言うことを意味しており、神に頼っていくと言うもの、委ねていくと言うものである。弟子たちが、何故自分たちは霊を追い出せなかったのか？と言う時、自分たち自身に霊を追い出す力、癒しを成す力を得るにはどうするのか？と言う問いであった。それに対してイエスは、「祈りなさい」と言う。自分たちには、そういう力はないと言うことを知れど、イエスはおっしゃりたいのではない。

信仰とは何か？祈りとは何か？ それは、私には力はないと認め、ただ神に身を委ねていくこと。たとえ病は治癒されなくとも、神の癒し（セラペウオー：誠心誠意看病する・寄り添う）はあるのである。神の憐れみは「できれば」なされるというものではない。（神谷）